

は「何だか登る気がなくなった」という言葉で凝縮され、やがて私の内部で、それは合宿成功への熱き闘志となつて昇華していった。

12月31日（雪）

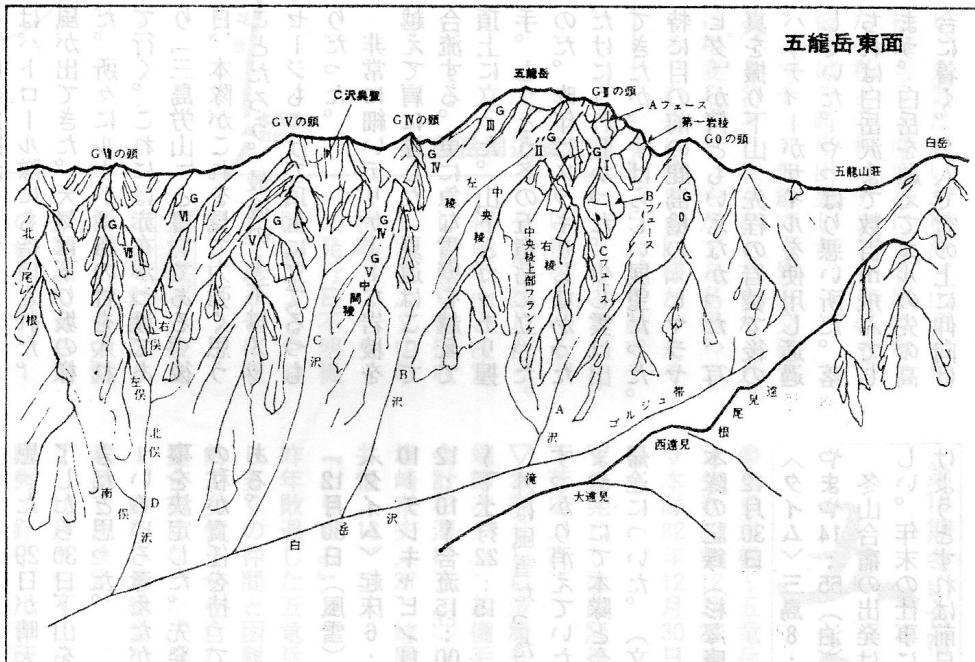
（タイム）地蔵平9：00—小遠見  
山11：10 BC 12：30（泊）

テレキヤビンの終点はスキーヤーでごつた返していた。小雪が舞い視界が良くなつたが、全員荷物を背負つて記念撮影。雪を見ると「よし、やるぞ！」という気概がグンと充実してくる。ケルンまでは全員一緒だったが、小遠見山を過ぎる頃には足の速さが揃わず隊が乱れた。先頭を歩いていた塩崎は、BC手前の登りで痙攣を訴えた。体の小さな彼は一番重い荷物を背負つて限界まで頑張つた。

時折風雪にトレースが消えて、

後続メンバーが気になつたが、杉澤康秀、塩崎がBCへ到着。10分遅れて杉澤好子が着いた。初めての冬山でその遅れが気になつていて、妹尾、新井の両君も意外に頑張つて13時10分には全員BCに集結した。先発隊の残していった工スペースは健在だったが、設営用のスコップが埋もれていて苦労した。

1月1日（天候不明）  
（タイム）起床3：10—出発6：00—五竜小屋8：10—25—五竜岳  
9：35—10：45—五竜小屋11：20  
—BC 12：30（泊）



それ程良い天気ではない。今年も初日は持めないのか。初心者がパティーの半数を占めることもあって、出発が予定より遅れる。

五竜へのトラバースルートは、雪の状態が悪く岩が露出している部分ではかなり緊張する。先行パティーの1人がスリップしたが、リーダー格の同行者が抱き抱えて大事に至らなかつた。しばらくして、私（杉澤）がスリップ。

対応が早かつたので、片手でピッケルを斜面に打ち込んで難なきを得た。杉澤、塩崎の若者組が登頂。やや遅れて竹端、毛利の熟年組が続いた。

視界はほとんどなく、記念写真も表情までは写らないだろう。下りはアンザイレンして慎重を期す。五竜小屋のツェルトに「たまたま！ のぼつたぞ！」ツェルトの4人が歓声で迎えてくれた。ツエルトの中で紅茶を飲ませてもらう。昨年末の敗北感をやつと晴らさせた。歓びが、湯気の中でジワッと湧いた。

という安心感がある。白岳山頂は雪が吹き飛ばされてしまつて、力チングカチンに凍つていて。全員集結して五竜小屋へ下る。小屋は全て施錠されて使用できない。川口、杉澤好子、妹尾、新井の初心者4名はここで待機する予定である。

ツェルトを出し、4名を収容すると、杉澤、塩崎、毛利、竹端のオーダーで山頂に向かう。